

大阪教育大学附属高等学校平野校舎 「不完全なプランニング」による関わり甲斐のあるメソッド（大阪府）

実施体制の概要

- 全校生徒数：約360名
（うちSGH対象生徒 全員対象とする）
- SGH対象学科：
全員対象とする
- HP：<http://hirano-h.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/>
SGHの取組
<http://hirano-h.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/sgh/>
- SGH委託費用総額：約4,029万円
（H27～R1：約680万円～約999万円）
- 校内の体制：SGH委員会（8名）を中心に、全教員が5つのWGに分かれて担当。「平野メソッド」開発は数名の教員の主導のもと、全教職員が関わりながら推進。
- 国内連携機関：
大阪教育大学、大阪大学ほか、多数の民間企業、行政と連携
- 連絡先
✉ horikawa@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
06-6707-5800（代表）

何を目指したか

生徒の現状調査に基づいて設定された4つの力（課題解決力、コミュニケーション力、多文化理解力、セルフマネジメント力）の育成

ツールのポイント

- 1 取組前からテストを用いて生徒の現状を把握。その後独自テストを開発
- 2 SGHカレンダーで、取組計画・進捗状況・目指すゴールを可視化し共有
- 3 課題研究の指導蓄積から、汎用性ある19の「平野メソッド」を体系化

SGH事業実施に必要な資源



- 22名と少数の教員集団。探究学習の指導経験の差を超えて全員での指導を目指した結果、知恵を出しあい協働する集団に変化。



- 海外研修費、海外交流アドバイザーや事務職員の人件費が大部分
- 各学年団が毎週の定例会議で課題研究の授業内容と指導法を検討。SGHの取組を全員で分担し、できる限り業務を平準化。



- 学校の取組や研究をSGH関連に重点化し、選択と集中を図る。



- 「メソッド通りに指導すれば」という声も一部にあったが、毎年工夫・改善を求め、現在は試行錯誤しながら改善する意識が浸透。

Plan

ツール作成の背景

- 取組開始時にPROGテストを用いて生徒の現状を把握したところ、教員の実感にも沿う形で、課題解決力、コミュニケーション力、多文化理解力、セルフマネジメント力の4つの力に課題がみられることが分かった。
- この力は課題研究に限らず、各教科・海外研修・学校行事等の全ての活動を通して育成すべきであることから、これらの活動と関連づけながら全校体制で臨むこととした。
- 一方、多くの教員が探究学習の指導経験が浅く指導観や方法も様々であった。全校体制のためには基本方針となるメソッドが必要との認識から、数人の有志教員のリードのもと、自発的な研修や検討会が盛んに。課題研究等で用いるツールの開発が行われ、「平野メソッド」として取りまとめられた。（以下リンクから各ツールをダウンロード、利用可能）

<http://hirano-h.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/%e8%aa%b2%e9%a1%8c%e7%a0%94%e7%a9%b6%e5%ad%a6%e7%bf%92%e3%83%84%e3%83%bc%e3%83%ab/>

Do

ツールの解説

✓ PROG調査からGPATへ

- 取組開始時に生徒調査を実施したことで、重点的に育てるべき資質・能力が明確に。
- その後、大教大との共同研究で、**育成したい力（コンピテンシー）を評価するテスト（GPAT）を開発**。PROGテストと併用し、毎年、生徒の成長を確認している。

✓ SGHカレンダー

- SGHカレンダーを掲示し各進捗を記入しあうことで**年間計画とゴールを全員が共有**。改善意識を高めるとともに、右記の「メソッド」による**過度の形式化を防いでいる**。

✓ 19のツールからなる「平野メソッド」

- 課題研究における教員の指導の統一性の担保を目的として、チームビルディング、課題発見・原因追究、進行管理や情報整理、成果物作成支援、評価といった課題研究を構成する要素ごとに、ワークや教材を集約した「平野メソッド」を開発し、HP上で公開している。
- **このメソッドは常に「暫定版」として教員にも認識されていることが特徴的であり、学年団ごとに毎年改良が加えられ、その蓄積が「学年のあゆみ」として毎年編纂されている。**
- こうした蓄積が、指導ノウハウの継承と、改善を止めない風土の両立に寄与している。

Check

取組内容の評価

- PROGテストの結果から、SGHの3年間のプログラムを学んだ生徒の「課題解決力」や「セルフマネジメント力」に相当する資質・能力が大きく伸びている。
- 教科においても、多くの教員が「平野メソッド」を活用した授業を実施しはじめ、その事例が増加している。
- 生徒からもフィードバックを受け、指導が改善している。例えば発表を評価するルーブリック（生徒同士がピア評価を行う）の内容の変更や、課題研究のアウトプットの水準の共通認識化を図った。

Action

指定期間終了後のいま

- WWLを活用し、引き続き課題研究を深めていく予定である。新たに、データサイエンスに基づいた論理的思考の育成に着目したいと考えている。
- 生徒への負荷を鑑み、課題研究の分量は減らさずに、余裕を持ったスケジュールに見直すことで、質を高めようとしている。
- グローバル人材に必要な資質・能力を測定するGPATは他の高校での実施も視野に大教大と開発を継続する。